

「天台維摩疏」智顛親撰説への疑義

— 吉蔵撰述書との比較を通して —

小野嶋 祥雄

【目次】

- 一、はじめに
 - 二、「天台維摩疏」に関する諸氏の見解
 - 三、「天台維摩疏」に於ける「有人言」の検討
 - 四、「天台維摩疏」と『法華玄論』二十条義・『法華義疏』十対について
 - 五、結語
- 一、はじめに

天台大師智顛（五三八―五九七年、以下、智顛と略）には、「天台維摩疏」・「維摩經疏」等と呼称される、摩羅什訳『維摩詰所説経』三卷（以下、『維摩経』と略）に対する註疏が存在する。この「天台維摩疏」は、晋王広の要請によって智顛がその晩年に著した著作であり、『維摩経文疏』二八卷、『維摩経玄疏』六卷、晋王広への第一回献上本の「十卷玄義」からの離出本である『三観義』二卷と『四教義』十二卷とが現存し

ている。

佐藤哲英博士は、この「天台維摩疏」の述作過程を明らかにされ、「天台維摩疏」の何れもが、智顛が親しく筆をとった親撰の書か、親しく筆はとらなかつたものの智顛の監修を経た親撰に準ずる著作であると主張された。¹ また、博士は、智顛晩年の代表的著作とされる三大部には、講説を筆録し修治を施した章安大師灌頂（五六一―六三三年、以下、灌頂と略）の私見が入っているという問題があることに比べ、「天台維摩疏」は智顛の親撰か親撰に準じる著作であることから、智顛晩年の教学を研究するための最も価値高い資料であると述べられている。

このように、佐藤博士によれば「天台維摩疏」は智顛晩年の教学を研究する上で最も資料的価値が高い著作であるとされるのであるが、平井俊榮博士は「天台維摩疏」に嘉祥大師吉藏（五四九―六三三年、以下、吉藏と略）の維摩經註疏が参照・引用されていることを指摘し、その吉藏の維摩經註疏の中で撰述年代が最も早い『浄名玄論』八巻でも開皇十九年（五九九年）二月であり、晋王広への「天台維摩疏」の最終献上（開皇十八年・五九八年正月）以後の著作であることから、「天台維摩疏」を智顛親撰とする佐藤博士の説に疑義を呈されたのである。²

筆者自身は平井博士の見解を首肯するものであるが、平井博士の指摘は『維摩經文疏』を中心になされたものであり、『三觀義』・『四教義』・『維摩經玄疏』と吉藏撰述書との関係については言及されていない。そこで本稿では、『三觀義』・『維摩經玄疏』に「有人言」等と引用される異説の中に、「天台維摩疏」の最終献上（開皇十八年・五九八年正月）以後の著作である吉藏撰『大乘玄論』が引用されていることを中心として、佐藤博士が主張された「天台維摩疏」の智顛親撰説に対して疑義を呈したい。

二、「天台維摩疏」に関する諸氏の見解

「天台維摩疏」について、佐藤博士は智顛の親撰か親撰に準ずる著作であると主張され、平井博士は智顛の親撰ではないことを主張された。両博士の主張の論拠を確認する為にも、両博士の研究を概観しておきたい。

一、佐藤哲英博士の見解

佐藤博士は、灌頂纂『国清百録』四巻を根本資料に据えて「天台維摩疏」の述作過程を明かにされ、その述作過程から「天台維摩疏」を智顛の親撰か親撰に準ずるものであると主張された。

佐藤博士は「天台維摩疏」の述作過程について、以下のように示されている。³

第一回献上 開皇十五年六、七月 玄義十卷

第二回献上 開皇十七年三、四月 玄疏六卷・文疏八卷

第三回献上 開皇十八年正月 玄疏六卷・文疏二五卷

佐藤博士によれば、智顛の晋王広への「天台維摩疏」の献上は都合三回である。

第一回献上では開皇十五年（五九五年）の六月から七月に「玄義十卷」が献上されたとし、この「玄義十卷」の離出本が現行の『三觀義』二卷・『四教義』十二卷と現在は散逸した『四悉檀義』であるとされる。

次いで第二回の献上では、開皇十七年（五九七年）の三月から四月に「玄疏六卷」・「文疏八卷」が献上されたとする。この中、「玄疏六卷」は「玄義十卷」を刪削したものであり、「文疏八卷」は『維摩經』「仏国品」の註釈であったとされるが、何れも智顛の希望によって焼却されたとする。そして最後の第三回献上では、智顛没後の開皇十八年（五九八年）の正月に、「玄疏六卷」と「文疏二五卷」が弟子の灌頂と普明とによって献上されたとし、これが現行の『維摩經玄疏』六卷と『維摩經文疏』二八卷（後三卷は灌頂の補遺）であるとしている。

以上が、佐藤博士が明らかにされた「天台維摩疏」の述作過程である。それでは次に、佐藤博士が「天台維摩疏」を智顛の親撰か親撰に準ずる著作であると主張された論拠をみてみたい。

博士は、第一回献上本である「玄義十卷」について、『国清百録』卷三「王謝義疏書」に「今著述する所は」⁴、「王論荊州諸寺書」には「始めて義疏を制され」⁵、「遺書与晋王」には「聖心は法を重じて浄名疏を著さしむ」⁶とあって、智顛が親しく筆をとって「玄義十卷」を著述したことを示唆する記述があることから、これを智顛親撰の著作であるとしている。次いで第二回献上本であるが、これについては焼却されてしまったものであることから、第二回献上本が親撰か親撰に準ずる著作である論拠は特に示されていない。そして、現行の『維摩經玄疏』と『維摩經文疏』にあたる最後の第三回献上本である「玄疏六卷」・「文疏二五卷」については、「此の義疏は口授して本を出だす」⁷とあり、智顛の親撰ではなく口授本であるが、「玄疏六卷」は智顛親撰の「玄義十卷」を自ら改治したものであり、「文疏二五卷」についても智顛の監修のもとで修治が行われ智顛の在世中に完成されたものであることから、智顛の親撰に準ずる著作であるとしている。

二、平井俊榮博士の見解

先の佐藤博士の研究を批判し、「天台維摩疏」が智顛の親撰ではないことを論証されたのが平井俊榮博士の研究である。

平井博士が「天台維摩疏」が智顛の親撰ではないことを主張されるに至った論拠は多岐にわたるが、①「天台維摩疏」中に吉蔵の維摩經註疏が引用されること、②『国清百録』の資料的信憑性の問題、の二点に集約されると考えられる。

先ず、①の「天台維摩疏」中に吉蔵の維摩經註疏が引用されることについて見ていきたい。平井博士は、「天台維摩疏」中に散見する「三論師」の語が吉蔵を指すものであるのか否かを三つの用例から検討し、

「三論師」という一般的な呼称のなかに、吉蔵の存在が予想される可能性が皆無とはいえないことを、上述の三例もまた示唆しているのである

と述べられている。⁸⁾

平井博士は、このような予想のもと、「天台維摩疏」中に吉蔵の維摩經註疏が引用される箇所を指摘するのである。博士が指摘された「天台維摩疏」が吉蔵の維摩經註疏を引用する箇所は、以下の通りである。

- ① 『維摩經文疏』卷一の經の科段。
- ② 『維摩經文疏』卷一の『大智度論』所引の「不思議經」。

- ③ 『維摩經文疏』 卷三の仏国品「心常安住無礙解脱」の解釈に関する有人説。
- ④ 『維摩經文疏』 卷五の阿修羅の語義に関する有人説。
- ⑤ 『維摩經文疏』 卷六の仏国品「天人得道」の解釈に関する有人説。
- ⑥ 『維摩經文疏』 卷十の丘井の喩。
- ⑦ 『維摩經文疏』 卷十五の二比丘犯戒説話。
- ⑧ 『維摩經文疏』 卷十五の「文殊師利品」「時維摩詰言、善來文殊師利、不來相來、不見相而見」の解釈に関する有人説。
- ⑨ 『維摩經文疏』 卷二一の眼病についての空華の喩えに関する有人説。
- ⑩ 『維摩經文疏』 卷二五の七識処の解釈。

次に、②の『国清百録』の資料的信憑性の問題についてみていく。平井博士は、吉蔵の『維摩經』の注釈書である『浄名玄論』八卷・『維摩經遊意』一卷・『維摩經義疏』六卷・『維摩經略疏』五卷の中、最初に撰述されたものは『浄名玄論』であり、その撰述年代は最も早くても開皇十九年（五九九年）二月であったとする。そして、智顛の第三回献上が開皇十八年正月であることから、「天台維摩疏」の中に吉蔵の維摩經註疏が引用されることは、佐藤博士が論拠とした『国清百録』が伝える「天台維摩疏」述作過程の記述自体に矛盾が有ることを指摘している。

以上、「天台維摩疏」に関する佐藤博士・平井博士の研究をみてきた。佐藤博士が論拠とされた『国清百録』が伝える「天台維摩疏」述作過程の記述について、平井博士は疑義を呈しているが、これは『国清百録』全体から考えられなければならない問題であることから、佐藤博士が論拠とされた『国清百録』が

伝える「天台維摩疏」述作過程を否定するまでは至っていないように思う。

しかしながら、平井博士が指摘された通り、第三回献上以後に著された吉蔵の維摩經註疏が引用されていること、また古くに島地大等氏に、『四教義』巻七に永徽二年から五年（六五二—六五四年）の訳出と考えられる玄奘訳『阿毘達磨俱舍論』が引用されているとの指摘が有ることから考えて、⁹ 少なくとも、現行の「天台維摩疏」には第三回献上以後に手が加えられていると考えてよいのではなからうか。

三、「天台維摩疏」に於ける「有人言」の検討

一、文献交渉の類型

『三觀義』・『四教義』・『維摩經玄疏』の中に吉蔵撰述書の影響を探っていく為に、これまでの智顛（灌頂）と吉蔵の著作間の文献交渉に関する研究を参照し、智顛（灌頂）と吉蔵の著作間に同一の文言が見られる場合に、どのような事例があるのか纏めておきたい。

というのも、本稿が目的とする『三觀義』・『四教義』・『維摩經玄疏』の中から吉蔵撰述書を引用した箇所を検出しようと試みる場合、『三觀義』等と吉蔵著作とに平行箇所があっても、そのことが即吉蔵著作の引用とは言えず、慎重な判断を要することが先学の研究成果から窺えるからである。

それでは、これまでの智顛（灌頂）と吉蔵の著作間の文献交渉に関する研究を参照し、両者の文献交渉の類型を纏めておこう。これまでの研究成果を参照すると、両者の文献交渉は次の四種の類型に纏めるこ

とができる。

- ① 智顛（灌頂）の著作が吉蔵の著作を参照する事例。
- ② 吉蔵の著作が智顛（灌頂）の著作を参照する事例。
- ③ 智顛（灌頂）と吉蔵の著作が、両書に先行する著作を同じく参照する事例。
- ④ 智顛（灌頂）と吉蔵の著作に同一文言が見られるも、資料的制限から如何なる判断もつかない事例。

先ずは、①の智顛（灌頂）の著作が吉蔵の著作を参照する事例についてである。この事例には、佐藤博士・平井博士が論証された、智顛（灌頂）の『法華玄義』・『法華文句』に吉蔵の『法華玄論』・『法華義疏』が引用されている事例を挙げることができる。¹⁰

次に、②の吉蔵の著作が智顛（灌頂）の著作を参照した事例については、古くは島地大等氏が指摘された、吉蔵の『仁王般若経疏』卷一上の記述についてである。¹¹ 吉蔵の『仁王般若経疏』卷一上には、

天台智者^ハ於^{ニテ}衆經ノ中^ニ闊^ク明^ス五義^ヲ。今於^ニ此ノ部^ニ例^{シテ}亦^ク五門^ヲ分別^ス。第一^ニ積^シ經ノ名^ヲ、第二^ニ出^シ經ノ体^ヲ、第三^ニ明^シ經ノ宗^ヲ、第四^ニ弁^シ經ノ用^ヲ、第五^ニ論^ス經ノ相^ヲ。

（『大正藏』卷三三・三三四頁・中）

とあり、吉蔵が智顛の五重玄義に倣い『仁王般若経』を注釈する旨が述べられている。この吉蔵の『仁王般若経疏』には、「天台智者」と明言していることから、智顛の著作を参照し引用したことは明らかであ

る。このように、数は少ないものの吉蔵が智顛の説を引用する用例もあることは、天台に対する三論の影響が強調される中で注意を要するであろう。¹²

また次に、③の智顛（灌頂）撰述書と吉蔵撰述書が、両書に先行する著作を同じく参照した事例については、智顛説・灌頂録『金光明経玄義』二卷・『金光明经文句』六卷と吉蔵『金光明経疏』一卷に、同じく現在は散逸している真諦三蔵の『金光明経』に対する註釈書の同一箇所を引用する例が藤井教公氏によって指摘されている。¹³

そして最後に、④智顛（灌頂）と吉蔵の著作に同一文言が見られるも、資料的制限から如何なる判断もつかない事例である。このような事例としては、智顛説・灌頂記『法華玄義』卷二上と吉蔵『法華玄論』卷二に共通して説かれる、相待妙と絶待妙の二妙説がある。この二妙説については、佐藤博士・平井博士に言及があるが、両博士ともにその影響関係については判断を保留されている。¹⁴

二、「天台維摩疏」に於ける「有人言」の検討

それでは、『三観義』等の中から、吉蔵撰述書と関係する箇所を探っていこう。『三観義』・『四教義』・『維摩経玄疏』は、經典の主旨を解釈する書物という性格からか、經典の文々句々を解釈する『維摩経文疏』に比べて、「有人言」等で引用される異説の数自体が少なく、その中でも三論学派に関説したものであると考えられるのは僅か三例を数えるだけである。

(一)、二諦の理・教に関して

先ず第一に『維摩經玄疏』卷六には、二諦が「理」であるのか「教」であるのかという問答があり、この問答の答えの中に「有師言」として引用される一説がある。

つまり、『維摩經玄疏』卷六には、

問曰ハク、一諦ハ為定是理トヤ、為定是教トヤ。答曰ハク、有師言ハク並是理ナリト、有師言ハク二諦ハ並是教ナリト、有師言ハク俗諦是教、真諦是理ナリト。故ニ經ニ云ハク、皆ナ以テノ世諦名字ナルヲ非ニト第一義ニ。今詳ス、此ノ三家明三義互有ニルコトヲ得失一也。

〔大正藏〕卷三八・五五六頁・下〕

とあり、二諦が「教」であるとの有師の説が紹介されているのである。

この二諦が「教」であるとは、吉蔵の著作中に多く見られる主張であり、吉蔵の二諦説が二諦を仏陀の説法形式と見る「約教の二諦」であることは、つとに指摘されている所である。

このことから、『維摩經玄疏』卷六に引用される有師の説とは、吉蔵の二諦説を指すとも考えられるのであるが、次に引用する吉蔵撰『二諦義』卷上の記述から、二諦は「教」であるとの主張は、吉蔵の独創ではなく吉蔵以前からの三論学派の伝統教学であることが分かるのである。

次ニ明ニ二諦是教義ナルヲ、撰嶺興皇已來並明ニ二諦是教ナリト

右の文の中、「撰嶺」とは撰山（現中国の江蘇省）棲霞寺に止住した僧朗（生没年不詳）のことを言い、吉蔵が自身の学系相承の系譜に挙げる人師である。また、「興皇」とは興皇寺法朗（五〇七―五八一年）を言い、吉蔵の直接の師である。『二諦義』巻上の記述は、二諦は「教」であるとの主張が、この両師の時代からの教説であることを伝えるのである。

以上のことから、『維摩經玄疏』の有師の説は広く三論学派の説を指すことになり、前に文献交渉の類型の③として挙げた、智顛（灌頂）撰述書と吉蔵撰述書が、両書に先行する著作を同じく参照した場合にあたるであろう。

(一)、毘曇と成実の得道について

次に、『四教義』巻四に引用される「有人」の説について見ていこう。『四教義』巻四には、

七ニハ為レ破ニ^ニサンカフ末世ノ僻説ヲ。小乗ト大乘トノ教人壞乱ス^ハハ半満正教ヲ。所以ハ者何^シ。如^ニシ有ル人ノ言フカ、毘曇見レ有^レ得^レ道ヲ、成実ハ見レ空ヲ入^レ道ニ。道非^ニ有無ニ、何^ソ得^レ言フコトヲ見^レ有^レ見^レ空ヲ得^レ道也。是レ則チ^ハ両論ハ申^フ二^ニ小乗ノ有^ト空^トノ教門^ニ。

とある。この「有人言」の説自体は、毘曇を学ぶ者は有を見て得道し、『成実論』を学ぶ者は空を見て得道することを述べたもので、さほど特徴のある説ではないが、吉蔵撰『中観論疏』にも同様の文言が見られるのである。

吉蔵の『中観論疏』巻第七末には、

復^タ有^二障^一之^レ説^一。四住ノ煩惱名^二煩惱障^一、即^チ二乘ノ所断ナリ。若シ無明住地名^テ為^二智障^一菩薩除^レ之^一ヲ。所言^レ解^トハ者、毘曇之人見^レ有^レ得^レ道^一、以^ニ有^レ解^一スルヲ断惑シ、成実之人見^レ空^一成^レ聖^一、空^一解^スルヲモテ断惑ス。大乘ノ断惑亦^タ同^ニ成論^一用^ニ空解^一断ス。問^フ、毘曇何^レ故^ニ明^レ凡夫ノ断惑^一、成実ハ^ハ弃^ニ凡夫ノ不断^一但^レ明^レ伏^一耶。答^フ、以^ニ毘曇見^レ有^レ得^レ道^一、外道亦^タ見^レ有^レ是^レ故^ニ断^一惑^一、成実ハ^ハ見^レ空^一得^レ道^一、外^ハ不^レ見^レ空^一故^ニ但^レ伏^一不^レ断^一。

〔大正蔵〕卷四二・一一三頁・下

とあり、『四教義』巻四の記述とパラレルな関係にある。ただ同じく『中観論疏』巻第八末には、

若^シ爾^ラハ、竜樹之風、四論ノ学者、此之四句並^ニ是^レ今時ノ方便ノ巧用ナリ。旧義^ハ但^レ得^ニ方便ノ用^一中^一之^一枝^一ノ^一ミヲ。又^タ、不^レ識^ニ此^一ノ^一是^レ方便^一而^レ執^レ權^一為^レ実^一。甚^タ可^レ傷^ム哉。他^ク云^{ハク}、毘曇見^レ有^レ得^レ道^一、成実見^レ空^一得^レ道^一。

〔大正蔵〕卷四二・一二七頁・中

とあり、吉藏自身が「他云」と明言していることから、吉藏の自説部分ではないことが分かり、先に文献交渉の類型の③として挙げた、智顛（灌頂）と吉藏の著作が両書に先行する著作を同じく参照した場合にあたるであろう。

(三)、三仮の解釈について

最後は、『三観義』巻上と『維摩經玄疏』巻二に述べられている、『成実論』に説示される三仮の解釈についてである。『三観義』巻上と『維摩經玄疏』巻二の文に大きな異なりはないので、ここでは『三観義』の文を引用することとする。¹⁵

三仮トハ者、一ニハ因成仮、一ニハ相続仮、三ニハ相待仮ナリ。此ノ三虚設ナルカカレト也。問曰ハク、三蔵ト摩訶衍トハ皆ナ明ニ三仮一、二經之異リ云何カ分別セシ。答テ曰ハク、随ヒテ情ニ明サハハ仮ヲ則チ是レ声聞經ノ所説ナリ。若シ就レテ理ニ明サハハ仮皆ナ如ニシトハ夢幻ノ即チ是レ摩訶衍ノ所説ナリ。此ノ經ハ訶ニ優波離ニ具ニ明ニス此ノ三仮之相ニ也。問テ曰ハク、三乗從リ三仮一入空ニ。若為カ分別セシ。答テ曰ハク、有人言ハク、声聞ハ多ク用ニ因成仮一、緣覺ハ多ク用ニ相続仮一、菩薩ハ多ク用ニ相待仮一。今謂ハク、三蔵ノ所明ニ三仮ノ相ハ別随便入理ニ。若シ摩訶衍ノ所明ニ三仮ナレハ皆ナ如ニ幻化一。三乗觀レシテ此ヲ同シク入空ニ也。

〔新出続藏〕卷五五・六七〇頁・中

右の『三観義』の傍線部は、三乗は三仮によって入空するが、三乗の入空と三仮は如何なる関係にある

のかとの問に対する解答箇所であり、その解答に、声聞乗では因成仮を用い、縁覚乗では相続仮を用い、菩薩乗では相待仮を用いるという「有人」の解釈が引用されているのである。

この『三觀義』に引用される「有人」と同様の解釈が、吉蔵撰『大乘玄論』に見られるのである。『大乘玄論』卷一「二諦義」には、

今先ニ弁^シ仮有^一、後ニ弁^ス仮無^一。常途ニ所^レ明^ス、凡^ソ有^ニ三^種ノ仮名^一。一ニハ者^ハ因成^レ仮、以^ニ四^微成^レ柱^一、五陰^ハ成^レレ^ルカ人^ヲ故^ニ言^フ因成^ト。二ニハ者^ハ相続^レ仮、前念^ハ自滅^{シテ}、成^ス後念^一、両念^ハ接連^{スル}カ故^ニ言^フ相続^レ仮^ト。三ニハ者^ハ相待^レ仮、如^キ君臣^ハ父子^ハ大小^ハ名字^ハ不定^{ナル}モ、皆^ハ相^ト随待^{スル}カ故^ニ言^フ相待^レ仮^ト。若^シ入^レレ^ルコト^ノ道^ニ所^レナレハ捉^ル二^乗ハ不^レ同^シカラ。声聞^ハ用^ニ因成^一、縁覚^ハ用^ニ相続^一、菩薩^ハ用^ニ相待^一。而^ル成論^ハ三^蔵為^レレ^ル宗^ト、多^ク明^ニシテ因成^一ヲ入^レレ^ル道^ニ。

『大正蔵』卷四五・十八頁・中

とあり、『三觀義』と同様に、声聞乗では因成仮を用い、縁覚乗では相続仮を用い、菩薩乗では相待仮を用いることが説かれている。

ただ、『大乘玄論』には「常途に明かす所」とあり、他者の説を下敷きにして吉蔵が述べた箇所であることが予想される。つまり、『大乘玄論』の用例から考えて、「常途に明かす所」とは光宅寺法雲（四六七―五二九年）・開善寺智蔵（四五八―五二二年、以下、智蔵と略）・莊嚴寺僧旻（四六七―五二七年）の説を指し、¹⁶さらに、日本三論宗の安澄撰『中論疏記』卷一本の記述によれば、智蔵撰『成実論大義記』を参照して書かれたと考えられるのである。その安澄撰『中論疏記』卷一本の記述を示せば、次の如くである。

言フハ世諦三仮ニ者、案ニルニ大義記第八卷ニ「諦義ノ中」ヲ。因成仮、相續仮、相待仮、此レヲ謂フ三仮ト。解シテ云ハク、於ニ三仮ノ中ニ、相待ノ一仮ハ是レ即チ体仮ニシテ、余ノ二種ノ仮ハ即チ是用仮ナリ。又タ五陰之内ヲ分折推求シテ而知レ無レキコトヲ人ノ、故ニ声聞ノ人ハ觀ニ因成仮ヲ。緣覺之人ハ鄙ニシテ於声聞ニ、從テ師ニ修學スルモ、憚ニ於菩薩ノ久劫ノ修行ヲ、以テ獨リ入レ山ニ見ニ於水流ニ、觀ニ於木ノ凋ムヲ、悟ニ解ニ無常ヲ、故ニ觀ニ相續ヲ。待ニシテ於生死ニ而有ニ涅槃。生死涅槃トハ無有ニコト自性、自性無キハ空ナリ。故ニ其體ハ是レ空ナリ。所以ニ、菩薩ハ觀ニ相待仮ヲ。

『大正藏』卷六五・十六頁・下)

このように、『大乘玄論』以前に他者の説が想定される場合、前に見た「毘曇見有得道、成実見空得道」の用例のように、期せずして両者が同一の著作を引用したとの解釈が成り立つ可能性があるが、筆者は次の理由から『大乘玄論』の「声聞用因成、緣覺用相續、菩薩用相待」の文は吉藏の自釈箇所であると考へたい。

第一に、先に引用した安澄『中論疏記』には、「解云」とあることから、「解云」以降は安澄自身の解釈部分と見ることができる。そして、その自釈箇所には三乗と三仮の関係についての解釈が施されていることから、『成実論大義記』には三乗と三仮の関係までの言及はなかったと推察されるからである。

第二に、『三觀義』と『維摩經玄疏』では、智藏の説を引用する場合には「開善法師云」等¹⁷とあり、その引用の方法が「有師」ではないことから、『三觀義』と『維摩經玄疏』に引用される「声聞多用因成、緣覺多用相續、菩薩多用相待」の説が智藏の説ではないと考えられるのである。

以上の理由から、『大乘玄論』の「声聞用因成、緣覺用相續、菩薩用相待」の文が吉藏の自釈であると認められるならば、この『大乘玄論』の撰述時期が問題となる。つまり、現在のところ『大乘玄論』の撰

述時期は、平井博士の考証によって、吉蔵の長安在任時代（五九九―六二三年）であると考えられているからである。¹⁸

つまり、『大乘玄論』巻四「二智義」には、

先^ニ依^テ中論疏^ニ、先^ス立^ツ異家^ノ義^ヲ。

『大正蔵』巻四五・五九頁・下）

とあり、『中観論疏』が『大乘玄論』より先に成立していたことを示す文言がある。この『中観論疏』はいくどかの改定を経て大業四年（六〇八年）に最終的に完成したと考えられているため、『大乘玄論』の撰述時期は大業四年（六〇八年）以後となるのである。

このように、『大乘玄論』の撰述時期が大業四年以後（六〇八年）と考えられることから、『三観義』と『維摩経玄疏』に『大乘玄論』が引用されることは、「天台維摩疏」の最後の第三回献上（開皇十八年・五九八年）以後に後世の付加が加わっていることを示すのである。

また、『三観義』・『維摩経玄疏』の「有人言、声聞多用因成仮、縁覚多用相続仮、菩薩多用相待仮」の文は、「天台維摩疏」の撰述問題について重要な問題を提起する。それは、智顛説・灌頂記『四念処』四巻にも同様の記述があることである。『四念処』巻一には、次のような記述がある。

私記者雜録^ス。声聞^ハ念処^ノ苦諦^ヲ為^レ首^ト、縁覚^ハ集諦^ヲ為^レ首^ト、菩薩^ハ道諦^ヲ為^レ首^ト、通^ノ菩薩^ハ滅諦^ヲ為^レ首^ト、別^ノ菩薩^ハ界外^ノ道諦^ヲ為^レ首^ト、円^ノ菩薩^ハ界外^ノ滅諦^ヲ為^レ首^ト。又^タ、声聞^ハ総相観、縁覚^ハ別相観、菩

薩^ハ総別双観、通^ト別^ト界^ノ内外^ト次第観、円^ハ界^ノ内外^ノ円観^{ナリ}。又^タ、声聞^ハ因成仮観^ヲ為^レレ^シ首^ト、縁覚^ハ相続仮^ヲ為^レレ^シ首^ト、菩薩^ハ相待仮^ヲ為^レレ^シ首^ト。

（『大正藏』卷四六・五六二頁・下）

そもそもこの『四念処』については、智顛の著作ではなく灌頂の著作であるとのことが、佐藤博士によって指摘されている。^{*19} 佐藤博士によれば、智顛に『四念処』の講説があったことは立証し難く、また、『四教義』や『摩訶止観』と類同の文が多々見られることから、『四念処』は『四教義』や『摩訶止観』を指南書として灌頂が著した著作であるとされる。筆者はこの佐藤博士の意見に賛意を表するものであるが、先に引用した『四念処』巻一の文は、更にその中でも「私記者雜録」と断る箇所であることから、智顛の教説になかった灌頂の私積箇所であると判断してよいだろう。

そして、智顛の教説になかった灌頂の私積箇所に三乗に三仮を配当する解釈が見られるということは、『三観義』・『維摩經玄疏』の「有人言、声聞多用因成仮、縁覚多用相続仮、菩薩多用相待仮」の文言も、智顛の教説ではなく灌頂の解釈なのではなからうか。

また、灌頂以後の天台人師が『四念処』の灌頂私積箇所を参考にして『三観義』に修治を加えたとは考えにくいことから、『三観義』・『維摩經玄疏』、ひいては「天台維摩疏」に灌頂が修治を施した一例であると考えてよいのではなからうか。

四、「天台維摩疏」と『法華玄論』二十条義・『法華義疏』十対について

ここでは、吉蔵撰『法華玄論』二十条義と『法華義疏』十対から、「天台維摩疏」の智顛親撰説について疑義を呈したい。

『法華玄論』二十条義と『法華義疏』十対とは、吉蔵が『法華經』「觀世音菩薩普門品」を註釈するに際して立てた二十と十の名目であり、それらの名目を示せば以下の通りである。

・吉蔵撰『法華玄論』卷十「論觀音普門義」*20

人法一雙・本迹一雙・三輪一雙・名徳一雙・内外一雙・智慧功德一雙・智断一雙・顯密一雙・慈悲一雙・二身一雙・權実一雙・三徳・浅深・二徳・神通示現・力無畏・四等四摂・解行・悲慧一雙

・吉蔵撰『法華義疏』卷十二「觀世音菩薩普門品」*21

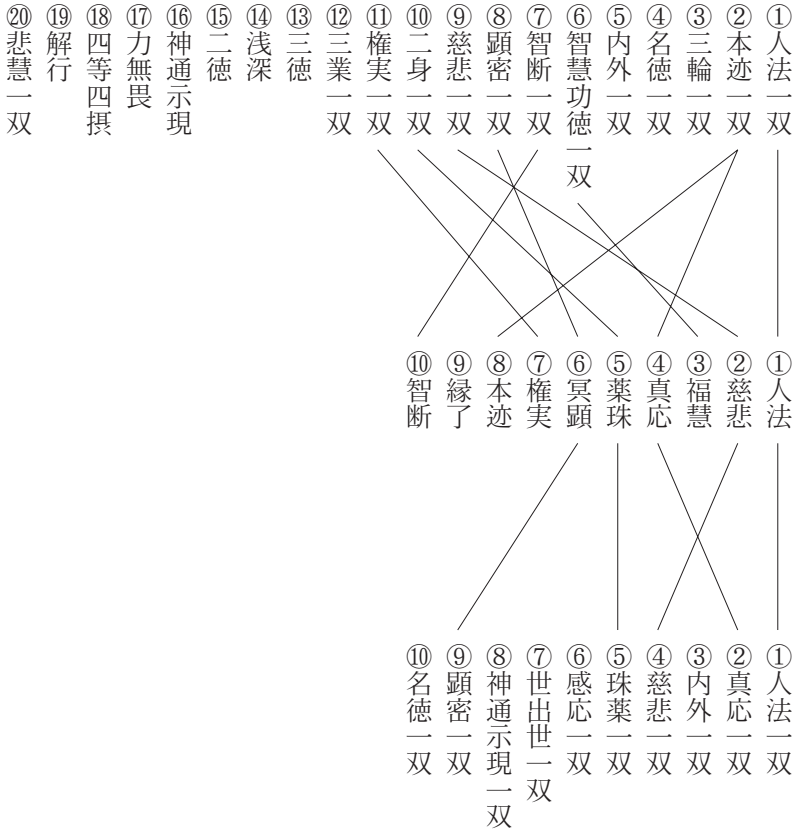
人法一雙・真応一雙・内外一雙・慈悲一雙・珠葉一雙・感応一雙・世出世一雙・神通示現一雙・顯密一雙・名徳一雙

この『法華玄論』二十条義と『法華義疏』十対は、智顛説・灌頂記『觀音玄義』卷上「第一釈名章」の通釈に挙げられる「人法・慈悲・福慧・真徳・冥顯・權実・本迹・縁了・智断」*22の十双義の名目の縁了を除いた全てと一致し、このことを一つの論拠とし、佐藤博士が『觀音玄義』を灌頂の著作であると論証されたことはよく知られている所であろう。*23今、それらの一致関係を示せば以下のようになる。

『法華玄論』二十条

『觀音玄義』十双義

『法華義疏』十对



筆者は『観音玄義』を灌頂の著作であるとすする佐藤博士の主張を首肯するものであるが、今注目したいのは、この佐藤博士の説を批判し、『観音玄義』を智顛の著作であるとすする安藤俊雄博士の研究である。²⁴ 安藤博士が『観音玄義』を智顛の著作であるとする最大の論拠は、『法華玄論』が挙げる二十の名目の人法一雙と三業以外の全てが『維摩經文疏』に説かれており、また、『観音玄義』の十雙の全てを『維摩經玄疏』・『四教義』に見出すことができることにある。以上のことから安藤博士は、『観音玄義』の十雙は『法華玄論』と『法華義疏』を参照して説かれた『観音玄義』の独自の説ではないとし、『法華玄論』・『法華義疏』と『観音玄義』との名目の一致については、吉蔵が智顛の『維摩經文疏』等を見たと後に『法華玄論』と『法華義疏』を著した為であるとすする。

この安藤博士の主張の中、本稿にとって最も重要なのは、『法華玄論』の二十条義を『維摩經文疏』に見出すことができ、また、『法華玄論』の二十条義と『法華義疏』の十対を参照したと考えられる『観音玄義』の十雙が『維摩經玄疏』・『四教義』にも見られることを安藤博士が指摘されたことにある。²⁵ つまり、ひとまず文献間の先後関係を保留にすれば、これは『維摩經文疏』・『維摩經玄疏』・『四教義』と『法華玄論』・『法華義疏』とに一致箇所が存在することが指摘されていることになり、また、筆者は安藤博士とは異なり『維摩經文疏』等が『法華玄論』・『法華義疏』を参照したと考える為、『維摩經文疏』等と『法華玄論』・『法華義疏』とに一致する名目が有ることが、「天台維摩疏」の智顛親撰説を疑う論拠になると考えるからである。

そこで、本稿が問題とする『四教義』と『維摩經玄疏』についての安藤博士の指摘を詳しく見れば、『四教義』では四教に約して淨無垢称を解釈する中に『観音玄義』十雙の人法と本迹以外の名目を検出することができる指摘され、また、『維摩經玄疏』では「第一積名章」の分科の中に人法・本迹・権実が

検出でき、その他の七つは積名別積中の四教分別の第三約位分別に説かれていると指摘されている。

ただ、次に示す通り、安藤博士が指摘された『四教義』と『維摩経玄疏』の当該箇所には、『四教義』では『法華玄論』二十条の三輪一双・三業・三徳・神通示現・力無畏・四等四摂を検出することができ、『維摩経玄疏』に於いても三徳・神通示現・力無畏・四等四摂が検出できることから、これは『観音玄義』の十双の名目が検出できるとするよりも、『法華玄論』二十条の名目の大半が検出できると考えるべきであらう。

『四教義』《何れの引用も『大正蔵』巻四六からの引用》

- ・三輪一双：六成就菩薩円満業。能顕一切神通。所謂三輪不思議化（七六三頁・下）
- ・三業：九能起法界三業（七六三頁・下）
- ・三徳：二住三徳涅槃名之為住者、一法身、二般若、三解脱（七六三頁・上）
- ・神通示現：六成就菩薩円満業、能顕一切神通、所謂三輪不思議化（七六三頁・下）
- ・力無畏：即是住十力。即是住四無畏（同・七六三頁・上）
- ・四等四摂：住四摂法（七六三頁・上）

『維摩経玄疏』《何れの引用も『大正蔵』巻三八からの引用》

- ・三徳：住者住三徳涅槃也。一法身、二般若、三解脱（五四二頁・上）
- ・神通示現：即是住四無閼智神通四摂諸波羅一切三昧陀羅尼門（五四二頁・中）
- ・力無畏：即是住大慈大悲十力四無畏（五四二頁・中）

・四等四撰：即是住四無閔智神通四撰諸波羅一切三昧陀羅尼門（五四一頁・中）

さて、『四教義』・『維摩經玄疏』が『法華玄論』・『法華義疏』を参照したことを論証するにあたり、先ず問題となるのは、『法華玄論』・『法華義疏』と『四教義』・『維摩經玄疏』の著作の前後関係であろう。安藤博士によれば、吉蔵が『四教義』等を参照して『法華玄論』・『法華義疏』を著したとされるのであるが、これは決して確定的なものではなく、吉蔵の『法華玄論』と『法華義疏』が先行して著された可能性も十分に考えられるのである。つまり、諸学者の考証によって、『法華玄論』と『法華義疏』の撰述は、吉蔵の嘉祥寺時代の著作であることが確実視されており、²⁶その吉蔵の嘉祥寺止住の始まりは道宣撰『統高僧伝』の記述から五八九年であるとされ、「天台維摩疏」の第一回献上（五九五年）以前なのである。²⁷

また、『法華玄論』については、具体的な撰述年代を明らかにする試みもなされており、平井博士は開皇十六年（五九六年）の撰述であると推定し、奥野光賢氏は開皇十四年（五九四年）と推定している。²⁸この中、奥野氏の開皇十四年（五九四年）の撰述であるとすると推定によれば、『法華玄論』が「天台維摩疏」に先行することになるのであるが、これについては奥野氏自身も推定の領域にとどまるであると述べていることから、ここで言えるのは、吉蔵が『維摩經文疏』等を参照して『法華玄論』・『法華義疏』を著したとする安藤博士の主張が確定的なものではないということのみである。

よって、『維摩經玄疏』と『四教義』が『法華玄論』と『法華義疏』とを参照したことを言うには、その他の論拠が必要となるのであろう。

そこで先ず第一に注目したいのは、佐藤博士が『観音玄義』の智顛撰述を疑うに至ったその経緯である。佐藤博士が『観音玄義』の智顛撰述に疑義を呈したのは、智顛の教学は三諦・三観・三智等という「三の

法門」から構成されることに比べて、『観音玄義』の十双は人法・慈悲・福慧等という「二の法門」から構成され、智顛の教学とは異質であることから、主に「二の法門」から構成される吉蔵教学の影響があるのではないかとの疑問を抱いたことによる。²⁹この佐藤博士が抱かれた疑問が妥当であれば、『四教義』と『維摩経玄疏』に見られる『法華玄論』二十条義と『法華義疏』十対の名目も智顛の教学とは異質なものであり、そこに吉蔵教学からの影響を窺うことも可能となるのである。

また、先に指摘した、『維摩経玄疏』巻二に『四念処』の「私記者雜録」と同一の文言が見られ、『維摩経玄疏』には灌頂の手が加わっていると考えられることも有力な論拠となる。このことは、『観音玄義』が灌頂の著作であるとする佐藤博士の研究と併せて考えると、『法華玄論』二十条の名目が『維摩経玄疏』に見られることは、実には灌頂が『維摩経玄疏』に手を加えた為であると考えられるのである。

五、結語

以上、佐藤博士が主張された「天台維摩疏」の智顛親撰説に対して、『三観義』・『四教義』・『維摩経玄疏』の中から吉蔵の著作を引用・参照していると考えられる箇所を検出することによって、『三観義』等を智顛の親撰とする佐藤博士の説に疑義を呈することを試みた。それらの検討結果を纏めると次の通りである。

まず第一に、『三観義』等に「有人云」等と引用される異説が、吉蔵の著作を指す場合がないか検討した。その中、三論学派に關説したと考えられるのは僅か三例であり、『維摩経玄疏』巻六と『四教義』巻四との二つの事例からは吉蔵撰述書との関係を見出し得なかった。ただし、最後の事例である『三観義』

卷上と『維摩經玄疏』卷二の「有人言、声聞多用因成仮、縁覚多用相続仮、菩薩多用相待仮」の文については、吉蔵撰『大乘玄論』卷一に「声聞用因成、縁覚用相続、菩薩用相待」とある説を指すことが検出できた。また、この『三觀義』卷上と『維摩經玄疏』卷二の文は、智顛説・灌頂記『四念処』卷一の「私記者雜録」とある灌頂の私積箇所に見られることから、『三觀義』・『維摩經玄疏』の「有人云」の文は灌頂の付加部分であることが判明した。

また第二には、安藤博士が「天台維摩疏」に『觀音玄義』十双義の名目が説かれているとする指摘に着目し、更に、その指摘箇所の中、『四教義』には『法華玄論』二十条の三輪一雙・三業・三徳・神通示現・力無畏・四等四摂を検出することができ、『維摩經玄疏』に於いても三徳・神通示現・力無畏・四等四摂が検出できることから、『四教義』・『維摩經玄疏』の当該箇所は、『法華玄論』二十条義と何らかの影響関係があることが分かった。そして、この『維摩經玄疏』・『四教義』と『法華玄論』・『法華義疏』の著作間の影響関係については、安藤博士の『四教義』等が『法華玄論』に先行するという主張が決して確定的なものではなく、また、佐藤博士に『法華玄論』二十条義と『法華義疏』十対の名目は、智顛の教学から見て異質であるとの指摘があることを参照し、先に『維摩經玄疏』には灌頂の手が加わっていることを明らかにできたことから、『四教義』・『維摩經玄疏』に『法華玄論』二十条の名目が見られることは、灌頂の付加による為であると結論した。

本稿は、『三觀義』・『四教義』・『維摩經玄疏』にも灌頂の付加が加わっているという以上の検討結果から、『三觀義』等を智顛の親撰とする佐藤博士の説に疑義を呈したいと考える。

* 1 佐藤哲英『天台大師の研究』第四篇・第二章「維摩經疏」(一九六一年、百華苑) 四一六―四四八頁参照。

* 2 平井俊榮『法華文句の成立に関する研究』第一篇・第二章「維摩經註疏をめぐる諸問題」(一九八五年、春秋社) 四五―九九頁参照。

* 3 佐藤前掲書、四四六頁参照。

* 4 『国清百録』卷三「王謝義疏書」第五十一(『大正蔵』卷四六・八〇八頁・上)

* 5 『国清百録』卷三「王論荊州諸寺書」第五十二(『大正蔵』卷四六・八〇八頁・上)

* 6 『国清百録』卷三「遺書与晋王」第六十五(『大正蔵』卷四六・八〇九頁・下―八一〇頁・上)

* 7 『国清百録』卷三「遺書与晋王」第六十五(『大正蔵』卷四六・八一〇頁・上)

* 8 平井前掲書、六三頁参照。

* 9 島地大等「天台浄土十疑論」(『六條学報』第八号、一九〇二年) 参照。島地氏が、良忠撰『往生要集記』卷四の記述によって指摘された、『四教義』卷七の玄奘訳『俱舍論』の引用箇所は以下の通りである。『四教義』卷七「問曰、菩薩幾時種三十二相。答曰、極遲百劫。極疾九十一劫。弗沙仏觀釈迦菩薩自身生弟子熟。弥勒菩薩自熟弟子生。多人難度一人易化。故弗沙仏於宝窟中。

放光照釈迦。菩薩釈迦菩薩尋光至弗沙仏所。於七日七夜一心觀仏。目不暫瞬。但用一偈称歎云、天地此界多門室、逝宮天処十方無。丈夫牛王大沙門、尋地山林遍無等。以苦行力超越九劫。在弥勒菩薩前成正覚也」(『大正蔵』卷四六・七四四頁・下)

また、『大正蔵』卷四六所収の『四教義』が底本とした(萬治二年刊・宗教学大本)では、撰号に「天台山修禪寺智顛禪師撰」とあり、禪師との呼称が第三者の編集を示唆するように思う。ただし、対校に用いられた甲本(順治十八年刊・増上寺報恩蔵本)・乙本(貞享五年刊・宗教学蔵本)には「沙門智顛」とある。

* 10 佐藤前掲書、平井前掲書参照。

*11 島地大等『天台教学史』（一九二九年、明治書院）一一〇頁参照。

*12 吉蔵が智顛の著作を参照した事例は、この『仁王般若経疏』卷一上以外に、同じく『仁王般若経疏』卷一上に「天台智者言」として「乗戒緩急」の四句分別が引用され、『法華義疏』卷二に「顛禪師云」として「四衆」の解釈が引用されることが指摘されている。平井前掲書、九頁参照。

*13 藤井教公「天台と三論の交渉―智顛説・灌頂録『金光明経文句』と吉蔵撰『金光明経疏』との比較を通じて―」（『印度学仏教学研究』三七卷二号、一九八九年）参照。

*14 佐藤前掲書、三一九頁参照。平井前掲書、一一六頁参照。

*15 『維摩経玄疏』卷二（『大正蔵』卷三八・五二六頁・上）

*16 『大乘玄論』には、法雲・智蔵・僧叟の三師を「常途三師」（『大正蔵』卷四五・十五頁・上）という用例がある。また、伊藤隆寿氏が発見された、日本三論宗の実敏撰『二諦義私記』の中に、「又、開善莊嚴立三仮。云因成仮、相続仮、相待仮。光宅師、云前三是、第四因生仮。以為四仮。問、且就破旧四仮。何名因成仮等。答、開善等云、五陰成人、四微成柱、名因成也。前念滅而続後念生、両念接連、不絶等、名相続仮也。長短方円等相待、名相待仮也」とある。伊藤隆寿「実敏『二諦義私記』の本文紹介（下）」（『駒澤大学仏教学部研究紀要』三八号、一九八〇年）一七七頁参照。

*17 『維摩経玄疏』卷五に「開善法師云」（『大正蔵』卷三八・五四七頁・下）、同卷六には「開善」（『大正蔵』卷三八・五六一頁・下）とあり、また、『三觀義』上には「成論三大法師」（『新出続蔵』卷五五・六七〇頁・下）とある。

*18 平井俊榮『中国般若思想史―吉蔵と三論学派―』第二篇・第一章「吉蔵の著作」（一九七六、春秋社）二五三―四〇四頁参照。

*19 佐藤哲英『続・天台大師の研究』第三編・第八章『四念処』の作者に関する研究」（一九八一年、百華苑）四三六―四六五頁参照。

*20 吉蔵撰『法華玄論』卷十「論観音普門義」「就観音略有二十条義。一者人法一双、二者本迹一双、三者三輪一双、四者名徳一双、

五者内外一双、六者智慧功德一双、七者智断一双、八者顕密一双、九者慈悲一双、十者二身一双、十一者権実一双、十二者三業一双、十三明三徳、十四浅深、十五明二徳、十六神通示現、十七力無畏、十八四等四攝、十九解行、二十悲慧一双」〔大正蔵〕卷三四・四四七頁・上)

*21 吉蔵撰『法華義疏』卷十二「觀世音菩薩普門品」初雙標中凡有十對。一者人法一双。〈中略〉謂人法一双也。二者真応一双。

〈中略〉謂真応一双。三者觀音謂菩薩意業。〈中略〉謂内外一双也。四者觀音謂大悲拔苦。〈中略〉謂慈悲一双。五者菩薩有二種身。〈中略〉故珠璣三王為一双也。六者釋觀音名顕衆生感義。〈中略〉謂感応一双也。七者標觀音名嘆菩薩能與衆生世間之樂。

〈中略〉謂世出世一双也。八者標觀音明神通。〈中略〉謂神通示現一双也。九者標觀音名謂明密利益。〈中略〉謂顕密一双也。十者標觀音明菩薩名。〈中略〉謂名徳一双也」〔大正蔵〕卷三四・六三三頁・下―六二四頁・上)

*22 智顛説・灌頂記『觀音玄義』卷上「今処中説略用十義以釋通意也。十義者、一人法、二慈悲、三福慧、四真応、五薬珠、六冥顕、七権実、八本迹、九縁了、十智断」〔大正蔵〕卷三四・八七七頁・中)

*23 佐藤哲英『天台大師の研究』第四篇・第四章「觀音經疏」(一九六一年、百華苑)四七五―四九六頁参照。また、佐藤哲英『続・天台大師の研究』第三編・第六章「如来性悪説の創始者は誰か」(一九八一年、百華苑)四二―四二七頁参照。

*24 安藤俊雄『天台学―根本思想とその展開―』附篇・第一「如来性悪思想の創設者」(一九六八年、平楽寺書店)三八七―四一八頁参照。

*25 この安藤博士の指摘には、佐藤博士も賛意を表されているようである。佐藤哲英『続・天台大師の研究』第三編・第六章「如来性悪説の創始者は誰か」(一九八一年、百華苑)参照。

*26 横超慧日「法華義疏解題」〔国訳一切経〕「経疏部・三」、一九三九年、大東出版)一―八頁参照。また、菅野博史『中国法華思想の研究』第二篇・第一章・第一節「吉蔵の法華経疏の成立順序」(一九九四年、春秋社)二七三―二九二頁、には、吉蔵の『法華経』註釈書の成立順序に関する従来の研究が纏められている。

*27 道宣撰『続高僧伝』卷十「吉蔵伝」には「隋定百越遂東遊秦望。止泊嘉祥如常敷引」（『大正蔵』卷五十・五一四頁・上）とあり、吉蔵は、隋が天下を平定（開皇九年・五八九年）した後、東遊し嘉祥寺に止住したとされる。

*28 平井俊榮『法華玄論の註釈的研究』（一九八八年、春秋社）三五九―三六〇頁参照。奥野光賢『法華玄論』の撰述時期について（『仏教史学研究』三二卷一号、一九九八年）参照。

*29 佐藤哲英『天台大師の研究』第四篇・第四章「観音経疏」（一九六一年、百華苑）四八二―四八三頁参照。

【キーワード】

天台維摩疏

智顛・灌頂・吉蔵

文献交渉